

THOT08

1

アンジュレータ超放射のコヒーレンスを用いた 電子ビーム特性測定の検討

寺田健人#,柏木茂,石附勇人、鹿又健、柴田晃太朗,高橋健,長澤育郎, 南部健一,日出富士雄,三浦禎雄,武藤俊哉,山田悠樹,山本大喜,濱広幸

東北大学電子光理学研究センター

第17回日本加速器学会年会 2020.09.03 オンライン



目次

□ はじめに

- ・ t-ACTSにおけるコヒーレントテラヘルツ光源開発
- ・コヒーレントアンジュレータ放射
- ロダブルスリット干渉計による電子ビームサイズ測定
 - ・ダブルスリット干渉計
 - The van Cittert-Zernike theorem
- □ t-ACTSにおけるビームサイズ測定実験
 - ・実験セットアップ
 - ・アンジュレータとテラヘルツ検出器
 - ・ 空間コヒーレンス度とビームサイズの測定





コヒーレントテラヘルツ光源の開発

加速器ベースのコヒーレントテラヘルツ光源の研究開発

t-ACTS: test-Accelerator as Coherent Terahertz Source

■ 速度集群法(Velocity bunching)による極短電子ビーム生成 → バンチ長 ~ 80fs

放射波長よりも電子ビームの時間幅が短い →「コヒーレント放射」

遷移放射、チェレンコフ放射^{#1}、スミス=パーセル放射^{#2}、
 アンジュレータ放射^{#3}など

✓ 電子ビームからのコヒーレント放射を用いた 電子ビーム特性測定について検討

#1 THPP16 (K. Nanbu), #2 FRPP62 (H. Yamada), #3 THOT05 (S. Kashiwagi)



コヒーレント放射

コヒーレント放射:バンチ内の電子数Nの二乗に比例した強度が得られる

放射強度:
$$P \Big|_{multi} = \left[N\{1 - F_{3D}\} + \frac{N^2 F_{3D}}{Coherent part} \Big|_{single} \right]$$

電荷分布: $S_{3D}(x, y, z) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma_x} \exp\left(-\frac{x^2}{2\sigma_x^2}\right) \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma_y} \left(-\frac{y^2}{2\sigma_y^2}\right) \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma_z} \exp\left(-\frac{z^2}{2\sigma_z^2}\right)$
 $\sigma_x, \sigma_y: 横方向ビ- \Delta \forall \prec \vec{x}, \sigma_z: \checkmark \lor \neq \mathbb{R}$
 $\checkmark \lor \neq \mathbb{R}$ 状因子: $F_{3D} = F_T F_L = \left| \exp\left(-\frac{\sigma_x^2 k_x^2}{2}\right) \cdot \exp\left(-\frac{\sigma_y^2 k_y^2}{2}\right) \cdot \exp\left(-\frac{\sigma_z^2 k_z^2}{2}\right) \right|^2$
 $k_x = 2\pi \sin\theta \cos\phi/\lambda, k_y = 2\pi \sin\theta \sin\phi/\lambda, k_z = 2\pi \cos\theta/\lambda, \lambda: 故 \text{stybe}, \theta, \phi: 観 \text{stype}$
 $\psi = 0$
 $\psi = 0$



アンジュレータ放射

電子がアンジュレータ内部で蛇行 放射スペクトル → ビームエネルギー・周期磁場で決まる



□放射波長 $\lambda_R = \frac{\lambda_u}{2\gamma^2} \left(1 + \frac{K^2}{2} + \gamma^2 \theta^2 \right)$ $\square偏 \cap n = \lambda - \varphi$ $K = \frac{eB_u \lambda_u}{2\pi m_e c}$ $\lambda_u : 周期長 \qquad \gamma : 電子ビ - \Delta x = \lambda - \varphi$ $B_u : U - \varphi = 0$ $\theta : U - \varphi = 0$

K = 3.51E = 22 MeV







コヒーレントアンジュレータ放射

縦方向
$$F_L(\lambda) = \left| \exp\left(-2\pi^2 \frac{\sigma_b^2}{\lambda^2} \right) \right|^2$$

K = 3.52, E = 22 MeV







ダブルスリット干渉計





矩形ダブルスリットによる干渉縞

干渉縞の強度分布

$$I(x) = I_0 \operatorname{sinc}^2 \left(\frac{\pi a}{\lambda L} x\right) \left[1 + |\mu_{12}| \cos\left(\frac{2\pi d}{\lambda L} x + \phi\right)\right]$$





干渉縞と光源サイズの関係



空間コヒーレンス度は光源の大きさによって変化する



The van Cittert-Zernike theorem

複素コヒーレンス度μ₁₂は光源の強度分布をフーリエ変換し、 それを正規化したものに等しい。





1.0

 $p = (X_1 - X_2)/R, q = (Y_1 - Y_2)/R, \psi = k[(X_1^2 + Y_1^2) - (X_2^2 + Y_2^2)]/2R$

(M.Born et al., 草川徹・横田英嗣(訳), "光学の原理III" 1975.)

ex.)電荷分布がガウス分布の場合





t-ACTSにおける光源サイズ測定試験実験

■ t-ACTSで極短電子ビームを生成し、コヒーレントアンジュレータ放射を発生 ■ 偏向電磁石の下流に設置した、ダブルスリット干渉計でビームサイズを計測



22 MeV

~ 80 fs

(mounted on XZ-stage)

~ 5 mm mrad

4 pC /bunch



アンジュレータ



■ 交叉型アンジュレータとして開発したうちの1台を使用。

Magnet array	Halbach type
Period length $\lambda_{ m u}$	80 mm
Number of periods N	7
Magnet material	NdFeB (<i>B</i> _r =1.22 T)
Gap	33 mm (fix)
Peak magnetic field	0.471 T (<i>K</i> =3.52)







ダブルスリットとテラヘルツ検出器

■ CURの干渉測定には、常温で使用可能な焦電検出器を使用した。
 ■ 検出器ヘッドにもスリットを装着した。





測定結果

$$I(x) = I_0 \operatorname{sinc}^2 \left(\frac{\pi a}{\lambda L} x\right) \left[1 + |\mu_{12}| \cos\left(\frac{2\pi d}{\lambda L} x + \phi\right)\right] + C$$





空間コヒーレンス度と水平方向光源サイズの測定

$$I(x) = I_0 \operatorname{sinc}^2 \left(\frac{\pi a}{\lambda L} x\right) \left[1 + |\mu_{12}| \cos\left(\frac{2\pi d}{\lambda L} x + \phi\right)\right] + C \qquad \mu_{12} = \exp\left[-2\left(\frac{\pi d\sigma}{\lambda R}\right)^2\right]$$



г



水平方向の電子ビームサイズ測定とその評価

1. ダブルスリットで測定された光源サイズから電子ビームを求める。





まとめ

- t-ACTSにおいて、テラヘルツ領域のアンジュレータ超放射の光源サイズ測 定実験をダブルスリットを用いて試験的に行った。
- ・測定の結果、電子ビームの水平方向サイズ(RMS)は約1.9mmであった。
- アンジュレータ直前でのQスキャンの結果より、アンジュレータ中の平均の
 ビームサイズは約0.89mmと予測された。
- 測定値と計算値の差異の原因としてはアンジュレータ内でのビーム軌道 変位が考えられ、その効果を考慮するとビームサイズは約1.2mmと求め られた。
- ・
 か射源であるアンジュレータと観測点の距離を離すなど、測定セットアップの改良を行う予定である。